

ヴィーラントと世界文学

木田 綾子*

Wieland and World Literature

Ayako KIDA *

The concept "world literature" is famous for what Goethe in his later years often talked about, but Christoph Martin Wieland also used this expression about a quarter of a century before Goethe.

Having a high level of linguistic ability since childhood, Wieland studied many literatures such as ancient Greek and Roman literature, English, French, Italian and Spanish literature. He learned a lot from Bodmer and others in Switzerland, and was able to exchange literary information at Count Stadion's Salon in his hometown Biberach. The magazine "The German Mercury", which he planned and edited, continued to be published for a long time. Magazines became a new place for information exchange, where writers worked together.

Wieland applied the new knowledge gained through reading and interacting with people to his literary works. He also popularized a new genre of novels in Germany. After that, Goethe and other many writers of the 19th century began to work on the genre. Wieland was certainly a pioneer of Goethe's concept of "world literature."

1. はじめに

クリストフ・マルティン・ヴィーラント(1733-1813)は、ドイツにおけるロマン（長編小説）の基礎を築いた作家と見なされているが、作品自体の古臭さは否めず、現代では顧みられることが少なくなった。確かに、『ドン・シルヴィオの冒険』（1764）や『アガトン物語』（1766-67）など、代表作の数々は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』以降の作品に多く見られる、人間の内面を深く掘り下げるといったものではないだろう。しかし、他のヨーロッパ諸国で既に確立されつつあったロマンという散文形式に着目し、さらに内容においては独自の思想を盛り込むことによって、当時まだドイツでは遅れていた散文という表現形式の可能性を広げたことは間違いない。

「世界文学」という概念を確立させたのは晩年のゲーテとされているが、ヴィーラントはゲーテより四半世紀ほど前にこの単語を用いていた。それは、ゲーテの目指した人的な国際交流をも含む構想までは及ばないかもしれない。しかし

ながら、ヴィーラントの作品には、ゲーテの構想の一部がすでに実践されていたのではないかとと思われるように、世界文学との影響関係が多々見受けられる。古代ギリシャ・ローマの文学をはじめとして、フランスやイギリス、イタリア、スペインなど、時代や国境を越えて多くの文献を研究してきたヴィーラントは、この概念に必然的にたどり着いていたのであろう。

本論はまず、ゲーテとヴィーラントがそれぞれ使用した「世界文学」という語について分析する。次に、言語に精通していたヴィーラントの読書体験に着目することによって、翻訳家としても活躍したヴィーラントが世界文学とどのようにかわり、自らの作品に取り込んできたのかを明らかにする。

2. ゲーテの「世界文学」構想

ゲーテが「世界文学」について初めて言及したのは、1827年と言われている。それ以来、書簡や論文など、様々な個所で「世界文学」についてたびたび話題にしている。ゲーテの

令和2年12月23日受付 (Received Dec. 23, 2020)

* 新居浜工業高等専門学校一般教養科 (Department of General Education National Institute of Technology (KOSEN), Niihama College, Niihama, 792-8580, Japan)

唱えた「世界文学」とは、海外の書物から知識を得る重要性を強調するにとどまらない。作品や作家が国境を越えて交流することの意義についての言及が多い。例えば、1828年の自然科学者たちの会合では次のように述べている。

私たちはヨーロッパ文学、いや普遍的世界文学というものを用意してきたが、これが意味するのは、異なる国が互いについて、互いの作品について心にとめるということではない。こうした意味では、すでに長いこと存在するし、今後も引きつづき、多かれ少なかれ更新されるからだ。そうではなく、ここで話題にしているのはむしろ、活発で熱心な文学者たちが互いに知り合い、愛情と共同精神によって、社会的に活動する機会を見出すということである。⁽¹⁾

また、エッカーマンによる『ゲーテとの対話』には、次のようなゲーテの言葉が記されている。ここでは、国境を越えて人々が交流することにより得られる利点が述べられる。

今やフランス人、イギリス人、ドイツ人が、密接に交流する際、互いに修正し合うという状況に差し掛かっているのは、大変良いことです。これは大きな利益であり、この利益は世界文学の成果となり、ますます明らかになっていくことでしょう。⁽²⁾

交通の発達により、人的交流が可能となる時代においては、作家間の交流も重要である。ゲーテによると、作品を理解するのは必ずしもその言語を母語とするものとは限らない。例えば、ドイツ人である自分たちのほうが、「バイロンやシェークスピアを明晰に理解し、彼らの功績を恐らくイギリス人よりもよく評価できる」⁽³⁾という。これは国によって遅れている分野があることも一因である。例えば、美学の面でドイツは遅れているため、イギリスの評論家であるカーライルの方がシラーをよく理解しているとゲーテは考える。

こうした自国の文学にとって不足していると見なされる点は、翻訳によって作品を知り、互いに批評し合うことによって補うことができる。これに関しては書簡の中で、「私が世界文学と名付けているものは、主として、一国民の内部に存在するもろもろの意見の相違が他の国民の見解や判断で取り除かれることによって生じてくるものであろう、ということである。」⁽⁴⁾と述べている。また、あるドイツ人がドイツ語で理解しづらいと感じた箇所を、フランス語に翻訳して説明することによって理解が深まったという例もゲーテは挙げている。フランス語で表現するほうが分かりやすい分野もあると考えた。

「世界文学」にとって翻訳の果たす役割は重要である。『ドイツ小説』というエッセイの中で、ゲーテは次のように述べている。

翻訳家とは、この普遍的で精神的な貿易の仲介者として

尽力し、交易を促進する仕事をしているのだと誰しもが見なされるだろう。というのも、たとえ翻訳の不十分さについて言及されようと、普遍的世界交流において、翻訳は最も重要で価値のある仕事の一つであるし、そうあり続けるからである。⁽⁵⁾

翻訳により、それぞれの国の特殊性を知ることができる。それらを認めただけで、その国の特殊性の中で真に価値あるものは、人類全体のものになることによって際立つ。ゲーテの唱えた普遍的「世界文学」とは、このような交流を通して自国の文学にとって必要なものと避けたほうがよいものを知り、そこから人類共通の財産として獲得されてゆくものと理解されうらうだろう。

3. ヴィーラントの用いた「世界文学」という語

ヴィーラントは、作品を繰り返し修正することで知られている。これに関してゲーテは、「段階的に校正を重ねていることから、作品をよりよく仕上げるためにたゆまぬ努力をしていた」作家と評している。⁽⁶⁾

ヴィーラントが「世界文学」という単語を使用していた形跡は、出版されたホラティウスの書簡の翻訳の校正の中に発見された。⁽⁷⁾

ヴィーラントは1780年代にホラティウスの書簡の翻訳に取り組んだ。翻訳作業は二十年以上に渡り、1782年に出版されて以来、数回の改訂がなされている。その中で今日注目されているのは、マールバッハのアーカイブに残されている1790年の版である。1946年、ヴィーラントが手書きで校正した跡が発見され、ここに「世界文学(Weltliteratur)」という単語が使われていたのである。それは、ホラティウスの書簡の翻訳の冒頭に置かれたアウグスト公への献辞の中に見出すことができる。

ローマというすばらしい時代に「都会風」という言葉で理解されているのは、首都の良き趣味であり、多彩な学識、世界知、礼儀作法である。人々はこうしたものを、優れた作家の作品を読み、極めて洗練された時代の教養ある優れた人々と交際することによって、無意識に身に着けていた。⁽⁸⁾

修正が加えられたのは三行目である。「学識」と「礼儀作法」の二つの単語がヴィーラントの手書きの校正では線で消され、「世界知と世界文学並びに成熟した人格形成と良き行い」と書き込まれていた。しかし、この書き込みは計画されただけで、実際には改訂されなかった。これは1800年ごろに書かれたとされている。ここで「世界文学」という単語を使用していることから、ヴァイツらの研究により、ヴィーラントこそ「世界文学」という概念の先駆者であると考えられるようになった。ただし、ここで「世界文学」という語が意味しているのは「学識」の意味に近いと、ゲーテが目指したような

「国境を越えた文学、文学者の交流」という壮大な構想とは異なるだろう。とはいえ、ホラティウスの時代の人びとが高い教養を身に着けていたのは、読書によるものであると同時に、書物を読む知識ある人々同士で会話をすること、すなわち社交の場に身を置いていたからこそであると考えている点は、交流を目指すゲーテの「世界文学」構想に通じるものである。

4. 読書環境と人的交流

4-1 幼少期から青年期

ヴィーラントが世界文学の先駆者と言われるのは、手書きの「世界文学」という単語が発見されたからというだけではない。牧師である父親の教育により、ヴィーラントは幼少期よりラテン語を学び、早くから古典文学に親しんでいた。1747年の冬から1749年夏にかけて、マクデブルク近郊にある修道院の寄宿学校で神学を専攻するための準備をした。ここでフランス語を学び、最新の哲学や文学を読んだ。語学を習得する能力は、早くから認められていた。初めてラテン語で詩を書いたのは、12歳のころと言われている。

1749年にエアフルト大学に入学すると、そこでライプニッツの哲学やセルバンテスの『ドン・キホーテ』を知った。この『ドン・キホーテ』は、後のヴィーラントの作品に大きな影響を与えることとなる。1750年の秋からはチュービンゲン大学で法律を学び始めるが、このころから詩作に本格的に取り組むようになる。法律の勉強は早々にあきらめ、ボードマーとの交流を通して文学に専念した。

4-2 スイス時代

1752年に、ヴィーラントはボードマーからチューリッヒへ招かれる。以後8年間スイスに滞在することとなり、ボードマーの指導のもと、数多くの敬虔な宗教的叙事詩を書く。この時期にボードマーやブライティンガーら、スイス派の人物たちから吸収したことは大きいだろう。しかしその後次第にボードマーとは疎遠になる。ヴィーラントは、プラトンやアリストテレス、ソクラテス、キケロ、ルキアノスやホラティウスなど、古代ギリシャ・ローマの文学に取り組み、敬虔主義的な作品は放棄するようになった。

1759年にチューリッヒからベルンに移ると、ヴィーラントはユーリエ・ボンデリと出会い、後に婚約する。高い教養を身に着けていたボンデリは、ベルンで知的なサロンを開いていた。二人にはルキアノスという共通の関心もあり、ヴィーラントは彼女に深い愛情を抱いていたという。しかし、ヴィーラントがビーベラハに戻る際に破局する。

作家であり、医者でもあるヨーハン・ゲオルク・ツィーママンともスイスで知り合っている。以後、二人は互いに良い刺激を与えあう友人関係を長く続けることができた。

4-3 ビーベラハ帰郷後

1760年に故郷であるビーベラハに戻ると、ヴィーラントの

作品は、優雅なロココ風へと変わる。それは、かねてから親交のあった元婚約者のゾフィー・フォン・ラ・ロッシュの義父であるシュターディオン伯爵のサロンに通った経験が大きく影響している。この時期の代表作の一つが、『妄想に対する自然の勝利すなわちドン・シルヴィオの冒険』（以下、『ドン・シルヴィオの冒険』と略す）である。

以後、ヴィーラントは数多くの作品を残すことになる。ロココ風とされた作風もまた後に変化し、古代ギリシャを舞台にした小説『アガトン物語』や『アブデラの人びと』、叙事詩『オーベロン』など、作風や文学ジャンルを超え、ヴィーラントは幅広く活動した。

4-4 雑誌『ドイツ・メルクーア』

1773年、ヴィーラントは文芸雑誌『ドイツ・メルクーア』を刊行する。フランスですでに長く刊行されていた雑誌を手本として、「学識のある人々だけではなく、女性や貴族にも興味を持ってもらえるような」雑誌を企画した。『ドイツ・メルクーア』は、はじめはフランスの雑誌のように政治ニュースから劇場の情報、寓話まで幅広いテーマを扱っていたが、その後芸術や学問の分野を中心に扱うことに落ち着いた。1790年からの『新ドイツ・メルクーア』を合わせると、約38年もの間広く読まれ、ドイツの文学界で長きにわたって反響を呼んだ。ヤコービ兄弟をはじめとして、メルクやヘルダー、ベッティガーら、ヴィーラントと親交のあった文学者が雑誌の執筆者として協力した。80年代後半にはシラーもヴィーラントに執筆を申し出ている。その他、ゲーテや初期ロマン派の作家たちなど、雑誌を盛り立てた人々は少なくない。こうして『ドイツ・メルクーア』は、ドイツにおける古典主義の基礎を敷くことになる。

ヴィーラントの関心や作風は多岐にわたり、ゲーテをはじめとする後の作家たちに大きな影響を与えると同時に、文学の発展にも大いに貢献した。

5. ヴィーラントと世界文学

幼少より言語能力の高かったヴィーラントは、読書の範囲も広い。とりわけ、ギリシャ・ローマ文学への関心は、生涯に渡り続いた。ヴィーラントは翻訳作業に取り組む一方で、影響を受けた世界文学を自らの作品に取り込みながら、ドイツ国内の文学を発展させていった。

5-1 古代ギリシャ・ローマ文学

翻訳を手掛けたホラティウスとの出会いは、1748年の寄宿学校時代である。ここでホラティウスの書簡詩と風刺詩を学び、その後スイス時代にもギリシャ・ローマ文学を熱心に研究した。

ホラティウスは、ドイツでは16世紀から読まれているが、それはラテン語の読める一部の知識人に限られていた。本格的に知られるようになったのは、18世紀半ばである。ロココ詩人、すなわちアナクレオン派と呼ばれる詩人らによって紹

介されてからである。彼らはフランスに倣って、恋愛や酒、自然、友情などを描き、明るく快活な精神を好んだ。

ヴィーラントはホラティウスと並行してルキアノスにも取り組んだ。ギリシャ語の翻訳はヴィーラントにとって初めての試みだった。すでにゴットシェートらの翻訳もあったが、ルキアノスをドイツで広く人気にしたのは 1788 年から 1789 年に出版されたヴィーラントの翻訳である。ヴィーラントは、ルキアノスの書いたギリシャ語の雰囲気を残しながら、ドイツ人が読みやすいよう翻訳を工夫した。この点が人気となった理由とされている。

5-2 イギリス文学

シェークスピアは 18 世紀後半にドイツに広まったが、これもヴィーラントの功績が大きい。シェークスピアについてヴィーラントが言及するようになったのは、スイス時代の 1755 年あたりである。著書『修辞学と詩作の理論と歴史』において、シェークスピアを「全ての天才の中で最も偉大であり、全ての作家の中で、最も完成され、最も奇抜である」と評している。

ヴィーラントが本格的に翻訳に取り組んだのは 1760 年代だが、それ以前にシェークスピア劇は三作品しか翻訳されていなかった。1761 年には、ヴィーラントによるシェークスピア劇『テンペスト』が上演された。これが、初のドイツ語による原作に忠実なシェークスピアの演出だった。1762 年から 1766 年にかけて、『シェークスピア戯曲集』と題して、ヴィーラントによる二十二作品のシェークスピア劇の翻訳が出版された。

イギリス文学の影響はシェークスピアだけではない。フィールディングやスターンもスイス時代に知った。彼らからは、ドイツでは当時まだ遅れていた散文による文学形式であるロマンを学んだ。

5-3 フランス文学

ヴィーラントはフランスの文化をとりわけ高く評価していた。寄宿学校ではラテン語とヘブライ語のほか、フランス語も習得し、ここで、ヴォルテールやフォントネルを原文で読むことができた。スイス時代には、ディドロやダランベール、モンテスキュー、ルソーに取り組んでいる。

ビーベラハに戻ると、シュターディオン伯爵のサロンに通い、フランスのサロンで好まれている文学ジャンル、メールヒェンなど、韻文や散文の小さな物語を知る。1765 年、伯爵のために優雅で軽妙なサロン向けの『滑稽物語集』を発表した。同時期に、『アガトン物語』や『ドン・シルヴィオの冒険』も書いている。妖精譚を含む後者は、フランスの妖精譚の影響が見て取れる。ヴィーラントはロココの優美さ、明るさをドイツ文学に取り入れたのである。

しかし、19 世紀の愛国的な空気の中で「フランス風」という語は軽蔑の意味が含まれるようになっていった。文学的関心が多岐にわたり、表現方法も様々に変化するヴィーラントもまた、次第にサロン風の文学からは離れていく。

5-4 イタリア文学

1760 年代にドイツでは、イタリア文学が流行する。ヴィーラントはすでにボードマーのもとでイタリア文学を知っていた。とりわけ、ルネサンスの叙事詩人アリオストの『狂えるオルランド』からの影響は、メールヒェン『イドニスとツェニーデ』(1768) や『新アマデイス』に表れている。枠物語形式の『ローゼンハインの六日物語』(1805)は、ボッカッチョの『デカメロン』に倣っている。作品の中の人物が話を語る「物語の中の物語」を含む文学形式は、ドイツではヴィーラントに端を発し、ドイツ近代文学の発展とともに進化していく。

5-5 スペイン文学

ヴィーラントがセルバンテスの『ドン・キホーテ』(1605/15)を最初に知ったのはエアフルト大学のあるところであるが、スイス時代も好んで読んでいた。『ドン・キホーテ』に倣ったのが、ヴィーラントの最初のロマン『ドン・シルヴィオの冒険』である。先述したように、この作品はフランス文学の影響も大きい。騎士道文学を読みすぎて妄想に取りつかれたドン・キホーテのパロディーとして読むこともできる。この長大な作品に挿入された「王子ビリビンカー物語」は、妖精譚を読みすぎて妄想と現実の区別がつかなくなったドン・シルヴィオを救うため、作中の哲学者によって語られる。ドン・シルヴィオは妖精譚を聞いて、妄想が妄想にすぎなかったことを知り、目的は遂げられる。

6. あとがき

以上のように、幼少期より教育環境に恵まれ、言語能力の高かったヴィーラントの読書は、国境を越えて広範囲にわたる。スイス時代におけるボードマーらとの人的交流、シュターディオン伯爵のサロンなど、文学の情報を得る機会にも恵まれた。ヴィーラントの編集した雑誌『ドイツ・メルクーア』では、世界の文学を翻訳して紹介し、批評文を掲載するなどして、ヴィーラント自身も雑誌の形で読者に交流の成果を提供した。当時活躍した文学者たちが協力して刊行した雑誌というメディアは、文学者の新たな交流の場としての可能性を広げた。

読書や交流の場で得た新しい文学の知識を、ヴィーラントは自らの作品に取り込んだ。古代ギリシャ・ローマの素材は、18 世紀のドイツ社会を映し、風刺文学を生み出した。新しい文学ジャンルにも挑み、当時は低俗とされていたロマンという散文のジャンルをドイツの文学界に広めることに貢献した。それがゲーテやロマン派の詩人たちの文学に発展することになる。

世界文学を取り入れ、自国の文学の発展につなげたヴィーラントは、確かにゲーテの目指した「世界文学」構想の先駆者であった。

註

-
- ⁽¹⁾ Goethe, Johann Wolfgang: *Goethes Wichtigste Äusserungen über „Weltliteratur“*. In: ders.: *Werke*. Textkritisch durchgesehen und kommentiert von Hans Joachim Schrimpf, Bd. 12. Hamburgerausgabe: 12., durchgesehene Aufl. München 1994, S. 363.
- ⁽²⁾ Eckermann, Johann Peter: *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*. Hrsg. von Chridtoph Michel. Berlin 2011, S. 257.
- ⁽³⁾ Ebd.
- ⁽⁴⁾ Goethe: *Goethes Wichtigste Äusserungen über „Weltliteratur“*. a. a. O., S. 362.
- ⁽⁵⁾ Goethe: *German Romance*. In: ebd., S. 353.
- ⁽⁶⁾ Goethe: *Literarischer Sansculottismus*. In: ebd., S. 243.
- ⁽⁷⁾ Vgl. Weiz, Hans-Joachim: „Weltliteratur“ zuerst bei Wieland. In: *Der Einzelne Fall. Funde und Erkundungen zu Goethe*. Weimar 1998, S. 349-352.
- ⁽⁸⁾ Wieland, Christoph Martin: *Briefe des Horaz*. In: ders.: *Werke*. Hrsg. von Manfred Fuhrmann, Bd. 9. Frankfurt a. M. 1986, S. 13.

参考文献

ヴィーランドの経歴等に関しては、主に以下を参照した。
Wieland Handbuch. Hrsg. von Jutta Heinz. Stuttgart 2008.